

# 財団法人労働科学研究所

1921年(大正10年)7月創立



川崎市宮前区(1971年祖師谷から移転)

# 労働科学研究所の2本柱

## 研究と教育活動

---

### 研究部

システム安全研究グループ  
疲労・労働生活研究グループ  
人間工学研究グループ  
職場環境リスク研究グループ

---

### 大型プロジェクト部

慢性疲労研究センター  
メンタルヘルス研究センター  
人材養成センター  
国際協力センター

---



小田急線



祖師谷時代の航空写真(戦後)

# 社会を変革する労働科学 の歴史と今後の展開

---

労働科学研究所における調査研究活動の  
伝統と特徴(本講座開設の目的)

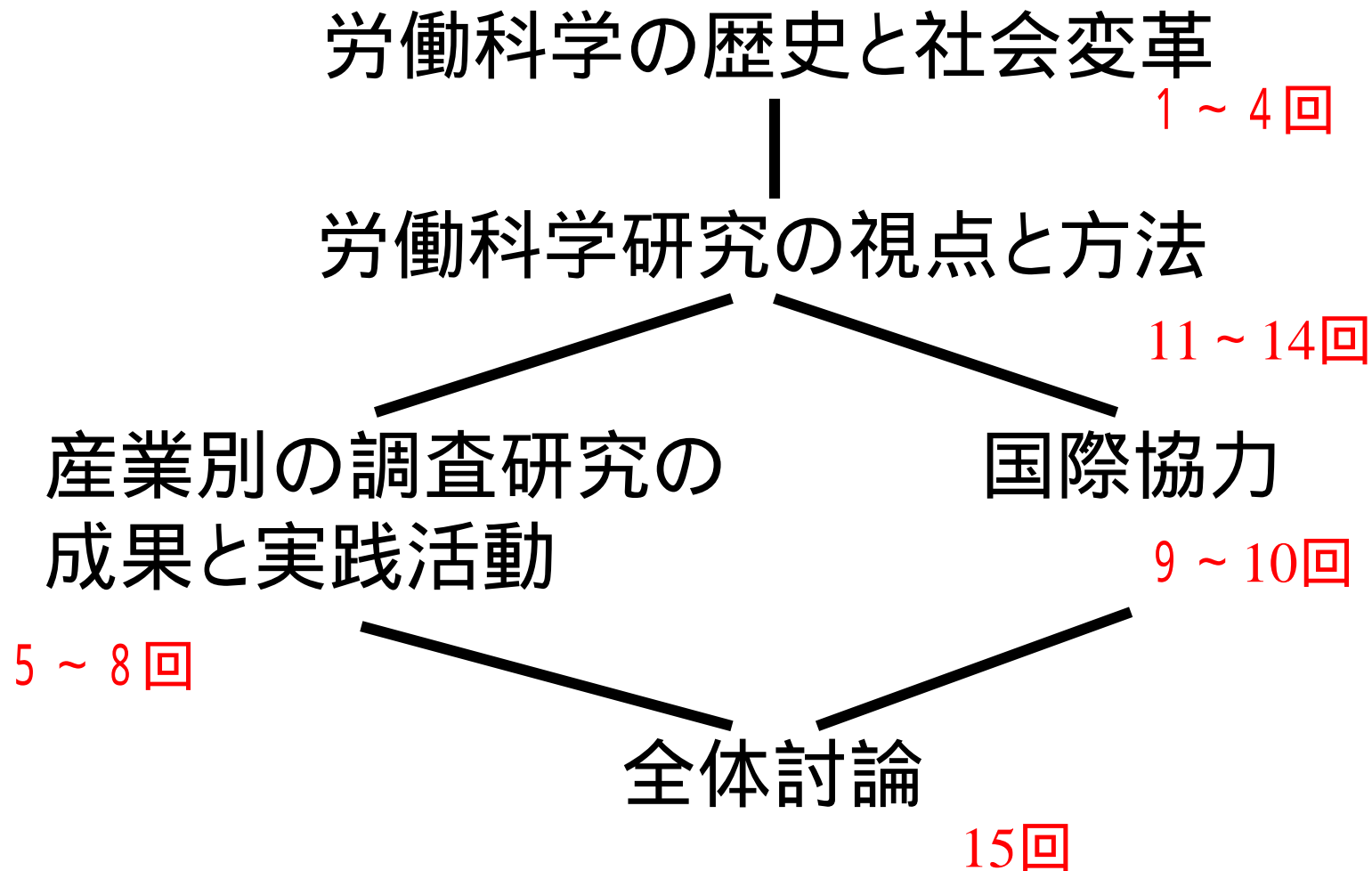
---

産業現場に密着した調査研究の基盤  
学際的研究(生理学、心理学、衛生学  
プラス社会科学)  
対策指向型の研究と実践

---

# 本講座の構成

---



社会を変革する労働科学の歴史と今後の展開

---

# 大原孫三郎と 倉敷労働科学研究所

---

酒井一博

# 前史

---

大原孫三郎と  
大原社会問題研究所

---



大原孫三郎(1880年～1943年)



中沢弘光画伯による大原孫三郎(労研所長室)

# 大原孫三郎の社会的貢献

設立年	孫三郎年齢	機関名	現在
1914年	33歳	財団法人大原奨農会	岡山大学資源生物科学研究所
1919年	38歳	大原社会問題研究所	法政大学大原社会問題研究所
1921年	40歳	倉敷労働科学研究所	財団法人労働科学研究所
1923年	42歳	倉敷中央病院	財団法人倉敷中央病院
1930年	50歳	大原美術館	財団法人大原美術館

---

2008年

大原5兄弟ネットワークづくりプロジェクト



大原社会問題研究所〔大阪市天王寺区、大正15年(1926)〕

# 大原社会問題研究所 設立趣意書から

---

世界戦争以来、社会問題の解決は我国に於ても、其の急を要するに至った。此の問題の解決は、公平なそして飽くまで根本的な立場からするを要し、決して一部利害関係者の見地からすべきでない。それには、問題の基礎に遡り、我が国の実際に鑑み、且つ諸外国の実例に徴して、充分研究調査を遂げなければならぬ。

暉峻義等



東京市本所区横川町細民長屋の児童〔大正7年(1918)〕

# 暉峻義等：社会衛生学 〔吐鳳堂、1927年刊〕

---

本所区横川町細民長屋の児童可憐なるものの集まりを見よ!!

余は真面目なる是等幼児の保育事業が彼等の成長と将来とを愛護せん事を希ふ。後方に子供負へる婦人あり、『負い紐』の一方に牛乳の瓶を挟みゴム管を以て子に与ふるを見る。帽子を冠れるは余自ら車夫某の幼児を抱きて写真中の入ったのである

---

---

# 暉峻義等

---

てるおか ぎとう



労研所長室に掲げられている暉峻義等像(作者不詳、部分)<sup>16</sup>

# 暉峻義等の前史

## (大原社会問題研究所入所前後)

---

なぜ僕が一緒になったかということと私が貧民窟におったときに、月島の労働者街で労働者の家計調査が、高野先生を中心に大学の持続活動として始まっていたんです。労働者の娯楽、大衆娯楽の大家の権田保之助というような連中が集って、労働者の家計調査、生活時間調査をやっていたのですが、そこに呼び寄せられて謀議に参加した。そういう意味でコネクションがついたわけです。

# 日本社會衛生年鑑

年八正大

大原社會問題研究所

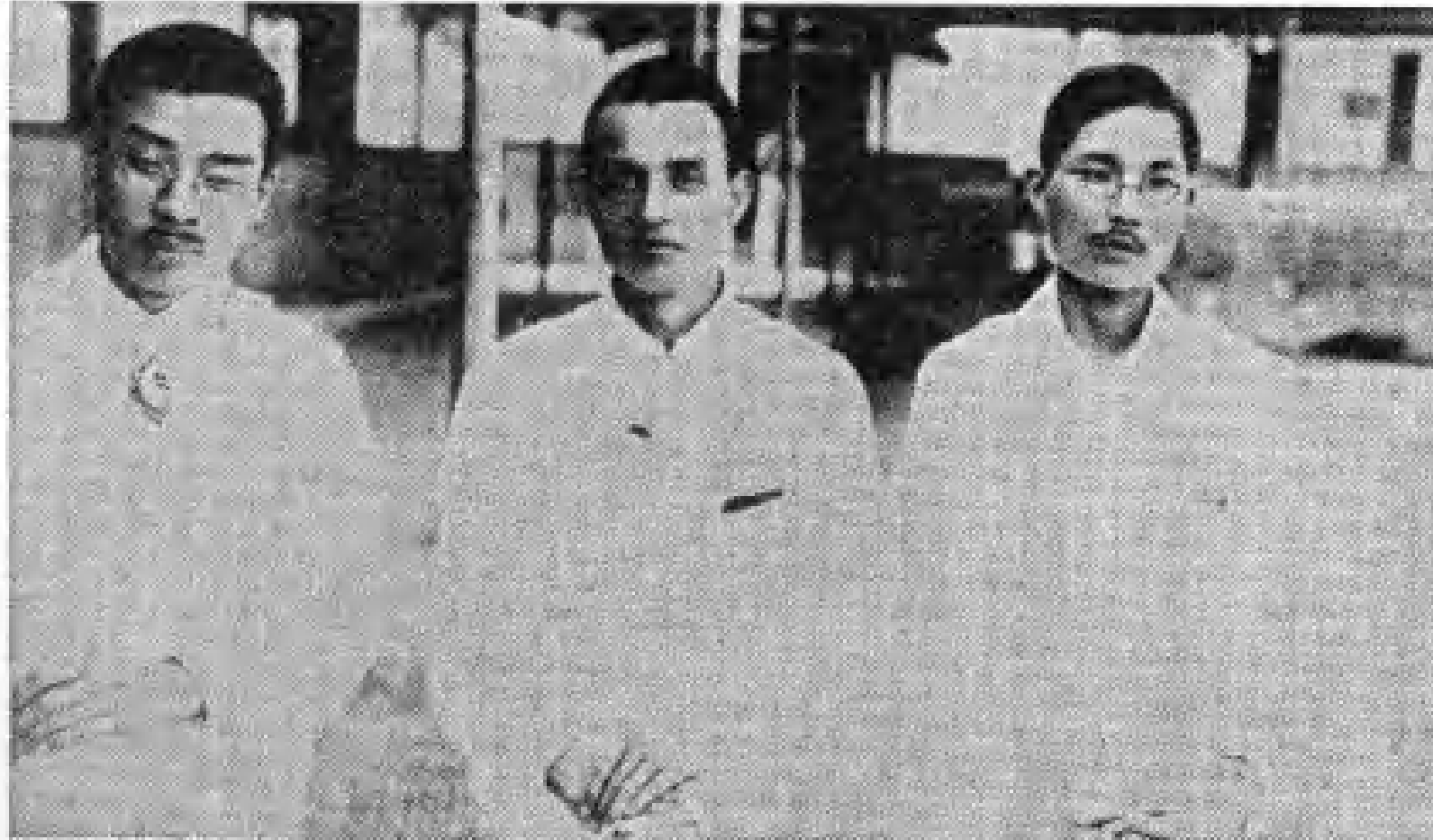
---

# 倉敷労働科学研究所 の創立

---

資料1 参照

# 大正9年(1920)夏の昼夜交代作業の予備調査



桐原葆見 28  
(心理学)

暉峻義等 31  
(生理学)

石川知福 29  
(衛生学) 20

# 昼夜交代勤務の疲労調査〔大正9年(1920)〕

桐原葆見



暉峻義等

# 倉敷紡績の分散式家族的寄宿舍



明治末から大正時代 22

# 創立時代の倉敷労働科学研究所



大正10年(1921)  
23

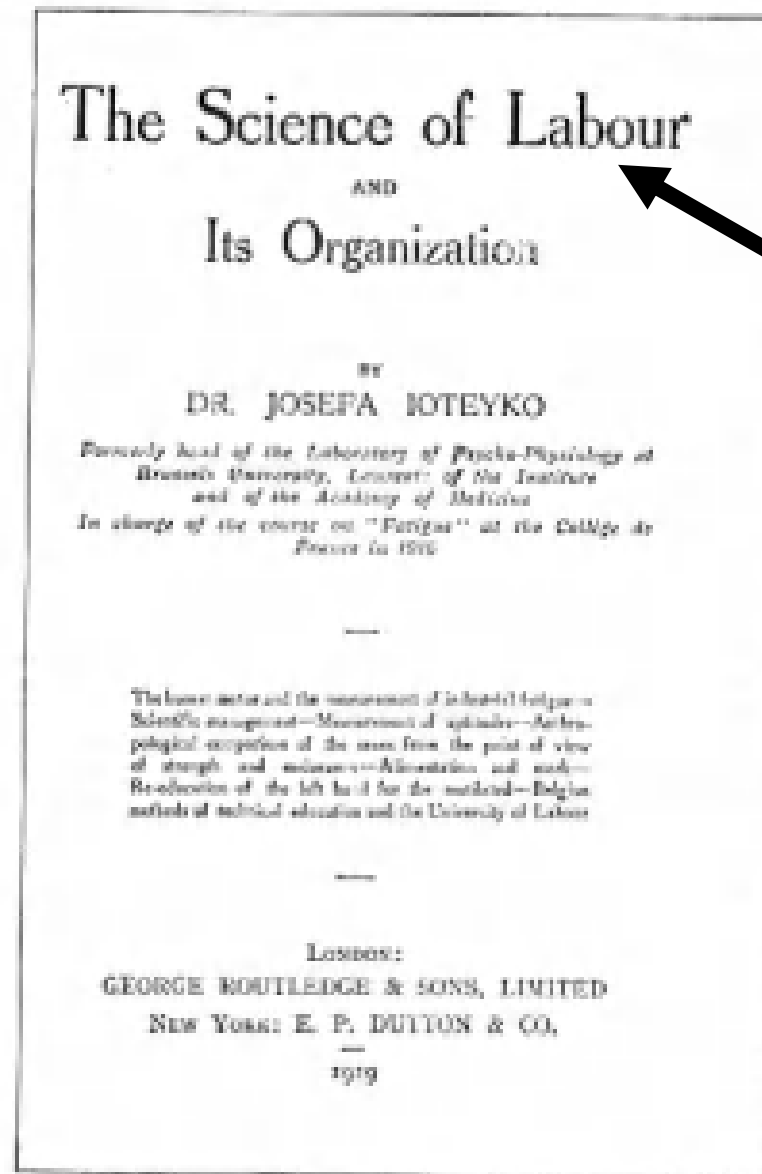
# 倉敷紡績株式会社回顧六十五年 にみる倉敷労働科学研究所

---

「人間生活ノ産業化、社会組織ノ産業化ニ付  
随シテ生起スル諸種ノ社会的問題、換言スレ  
バ近代文化問題ノ心ヲナス所ノ産業組織ニツ  
イテノ医学的研究」を主題として研究が開始  
された

---

イオテイコ:労働科学の方法(1919年刊)







資料2参照

「労働科学研究」(現労働科学)第1卷第1号  
〔大正13年(1924)創刊〕

# 「労働科学研究」誌の特徴

---

メッセージが込められている:

労働科学の旗がある

交代制勤務の労働負担がこの時代から取り上げられている

毎号に交代で翻訳物を掲載している

女性労働の研究が行われている

作業環境の測定と評価が始まっている

---

現場実践に立ったユニークな研究

安全・健康・環境に関する三位一体アプローチ

# 労働科学研究所歴代所長

	所長名	専門	就任年
初代	暉峻 義等	生理学	1921 ~
2代	勝木 新次	生理学	1949 ~
3代	桐原 葆見	心理学	1951 ~
4代	勝木 新次	生理学	1957 ~
5代	齊藤 一	生理学	1962 ~
6代	多田 治	衛生学	1982 ~
7代	小山内 博	衛生学	1984 ~
8代	西岡 昭	心理学	1986 ~
9代	小木 和孝	生理学	1993 ~
10代	酒井 一博	人間工学	1999 ~
11代	前原 直樹	生理学	2001 ~
12代	酒井 一博	人間工学	2007 ~

# グループワーク課題

---

三浦豊彦：労働科学研究所60年史話（資料1）  
29～33ページを読んで、あなたが大原  
孫三郎なら、いま、何を変革したいですか。

---

# 小レポートの課題

---

大正時代に倉敷労働科学研究所が誕生した要因について、あなたの思うところを記述してください。

---